東京大学教養学部哲学・科学史部会　哲学・科学史論叢第二号　平成12年1月（129-152）

否定判断論について
―心理主義からフッサールまで―

鈴木俊洋

序

本論文の目的は、フッサールの現象学的枠組みが出来る以前の判断論における否定判断論をめぐる議論を整理し、それをフッサールの枠組みで捉え直すことである。また、それによって、経験に即した論理学を目指した認識論的判断論の意図、と、「事態（判断されるもの）」のイデア性の確認、を両立させる試みとして、フッサールの「論理学の哲学」の一側面を浮かび上がらせることである。

一　フッサール以前の否定判断論

一・一　心理主義と態度決定説の否定判断論争

心理主義の判断論が登場するまで、「否定」とは、「肯定」と並ぶ、判断の分類概念の一つであり、その分類概念は「質」と名づけられていた。ある否定判断（否定文）には必ず対応する肯定判断（肯定文）があり、逆に、ある肯定判断には必ず対応する否定判断がある。そして、この対は、言表の正しい連続形式を論ずる論理学において非

常に重要な対である。我々の言表が正しいものであるために必ず守らねばならない論理法則の一つに矛盾律があるが、それは、ある肯定判断をしながら、それに対応する否定判断をしてはいけない、というように言い表すことができる。また、アリストテレス以来論理学の中心的主題だった三段論法においても否定判断と肯定判断の対応は非常に重要な役割を果たしている。

本論文の考察の出発点となる心理主義の判断論は、このような論理学に異をとなえる新しい論理学として登場した。それまでの論理学が、三段論法を中心として、我々の言表する文の連続がいかなる形式を持つときに正しく行われ、いかなる形式を持つときに誤って行われるのかを論じてきたのに対し、心理主義は、そのような「文」を中心とした論理学、つまり、文の形式と、その形式にそくした推論形式の学としての論理学に異をとなえる。彼らは、まず、推論の単位である一つ一つの言表、あるいは判断、とはいかなるものなのか、を論ずる。そして、その判断論は、特に「否定判断」の扱い方において抜本的な変更を含んでいたため、当時の判断論において、否定判断の扱い方は大きな論争問題となった。また、もちろん、否定判断観の抜本的変革は、矛盾律のような否定を含む基本的論理法則の解釈にも影響を与える。そして、論理学は、「文としての判断」をその形式にしたがって分類し、その連続する形式の正しさを扱う推論形式の学から、判断とは何か、論理法則とはいかなる法則なのか、を論ずる学へと変化することとなった。

一・一・一　心理主義の否定判断論

心理主義の判断論は、従来中心的に扱われてきた「文としての判断」は「個人の内部で生き生きと遂行される判断」の結果にすぎず、判断の本質の探究のために重要なのは後者の判断の分析であるとする。「個人の内部で生き生きと遂行される判断」とは、彼らに従えば、我々の内部で起こる表象の発生消滅のことである。具体的に、心理主

義判断論の代表者であるジグワルトをみてみると、彼は、言表の発生過程を次のように分析している(1)。

例えば、「宮殿が燃えている」という文によってコミュニケーションが行われる場合、まず、①話者の内部における「燃えている宮殿」の像が出発点となる。そして、②その像のなかに、話者は、「よく知っているあの建物(宮殿)」と「そこから出ている炎」を把握し、その二つの要素を「分離する」。その後、③その分離された二つの要素を結合し、「宮殿が燃えている」という表象結合ができる。④その表象結合が文という衣をまとう。⑤聞く者は、二つの語「宮殿」と「燃えている」によって喚起される、それまでは何の関係もなかった二つの表象を統一することによって文を理解する。そして、最終的に、⑥聞く者は話者の持っていたはじめの表象に到達する。

上の過程のうち、ジグワルトは、「本来的判断」を、③の分離された部分表象同士の結合の過程であるとする。ジグワルトによれば、本当の「判断」とは「表象結合」のことである。

このように、心理主義の判断論にとって本来的判断とは、表象の発生消滅の過程における出来事のことである。そして、彼らにとって「表象」とは「リアルな心像 Bild」のことである。したがって、その発生消滅の過程の中に「ない」ものについての判断である「否定判断」は、本来的判断ではないことになる。「宮殿が燃えていない。」という文は、我々の内部で発生消滅する心像の結合や分離では説明ができない。我々の内部にある心像は、「宮殿」であるか、「燃えている」(2)であるか、それらが結合した「宮殿が燃えている」でしかない。このような考えから、心理主義の判断論において、否定判断は「二次的判断」、すなわち、先立つ肯定判断へと向かいそれを偽とみなす判断、とされる。それは、「宮殿が燃えている」のような表象結合に向かい、それを拒否する判断主観の態度決定にすぎない。こうした否定判断観はさまざまな問題点を引き起こす。そして、その一つが、基本的論理法則の解釈にあらわれることになる。

心理主義の判断論において、判断の客観的妥当性は、「表象の発生の万人における必然性」に基づいている。つま

り、判断が「客観的に妥当するものとして、すなわち、真であるものとして認識される」[3]のは、表象が発生するさいに、「我々の感覚的直観の普遍法則に従い、全ての人において、同じ対象によって同じ主観的像が喚起される」[4]ことに基づいている。

この点についての批判はここではおいて、心理主義の主張に沿って考えると、かりに表象の発生過程の客観的一意性が心理学によって保証されたあかつきには、ある肯定判断が真であることの客観性は保証される。しかし、一旦発生した表象についての主観的態度決定に過ぎない否定判断は、心理主義者にとっては、たんなる「思考の運動」であり、客観的妥当性は保証されない。結果的に、ジグワルトは、矛盾律のような否定の関係する論理法則を、我々の態度決定に関する運動法則とみなす。それは、「表象発生の一意性」を表現している「同一律」に従属する派生的な論理法則である。

一・一・二　態度決定説の否定判断論

心理主義の判断論に対し態度決定説の判断論は、心理主義判断論のいう「二次的判断」こそが本来的判断であるとする。

態度決定説判断論の代表者であるヴィンデルバントは、心理主義の論者のいうとおり、否定が「意識の関係形式Beziehungsform」であり、否定判断は「判断についての判断 ein Urteil über ein Urteil」であることを認める。しかし、彼に従えば、哲学の問題にすべき判断は、この「二次的判断」のほうである。この第二の判断は第一の判断とは違う判断である。それは、表象同士の関係の表現ではなく、ある判断の真理価値 Wahrheitwert についての価値判断である[5]。そして、彼によれば、前者の判断は、「表象の発生消滅」に関わることであり、心理学の対象であるのに対し、「哲学は、表象がいかなる価値を得るべきかを論ずるもの」[6]である。

心理主義の判断論では、「肯定的判断 affirmatives Urteil」と「定立的判断 positives Urteil」の区別ができていなかった。本来的な意味の「肯定判断」とは、表象の相互関連の表現である「定立判断」を「承認」することであり、否定判断は定立判断を「拒否」することである。換言すれば、肯定判断は定立判断に真という価値を与える価値判断であり、否定判断は定立判断に偽という価値を与える価値判断である。価値判断とは、先行する定立判断に対する「態度決定」であり、彼によれば、この態度決定こそが、哲学の問題とすべき「判断」なのである。

したがって、彼にとって肯定判断と否定判断は同格の関係にあり、それらの判断、つまり「承認」「拒否」という態度決定を規制しているのが論理法則である。そして、彼らにおいては、主観的な態度決定がいかにして普遍的妥当性を持つ論理法則に従いえるのか、と言う問題に取り組むことが、哲学の課題の一つとなる。

一・一・三 「否定」と「判断」の位置づけ—心理主義と態度決定説—

以上からわかることは、否定判断の解釈について論争を戦わせた、心理主義と態度決定説という二つ立場の争点は、「否定判断の位置づけ」にあるのではなく、「本来的判断の位置づけ」にあることである。ヴィンデルバントとジグワルトの判断論は、両者ともに、否定判断を「(初次的) 判断についての (二次的) 判断」としている点では共通している。ジグワルトからヴィンデルバントへの移行は、「否定判断の位置づけの変化」ではなく、むしろ、「肯定判断の位置づけの変化」である。

もし、ジグワルトとヴィンデルバントの間の否定判断についての論争が、同じ判断論の図式のなかでの、判断の定義問題にのみ帰着するのであれば、それは単なる術語上の皮相的な争いにすぎないであろう。しかし、判断論者にとって「判断」という言葉が本来的にさすものは、単に「判断」という名前を持つにすぎないわけではないように思われる。本来的な意味での「判断」とは、彼らにとって、特別な呼称なのである。ここで、彼らの判断論とは

何を目的として、何を問題としていたのか、について論じておく必要がある。

ある否定判断を含んだ推論があったとする。そして、その推論は、論理法則にしたがって、ある時は正しく、ある時は誤っていたりする。そして、推論の具体的内容を問題とせず、その形式のみにしたがってどのようなときに正しく、どのようなときに誤っているのか、を問題とするのが論理学の課題の一つである。そして、形式にそくして真偽を規制する法則として矛盾律などの論理法則が取り出される。そのとき、論理法則は、その推論に登場する各判断のどの部分に関係しているのだろうか。つまり、論理法則は、その推論が正しいものであるために、各判断のどの部分を規制している法則なのだろうか。

彼らが問題としたのは、このような問題であったと考えられる。個別の「判断（と称されるもの）」のうちの、論理法則の規制が及ぶ部分のことを、彼らは「（本来的な）判断」と呼ぶのである。

そして、心理主義は、我々の内部における表象の発生消滅の過程を本来的判断とし、論理法則を、我々の表象の発生消滅の過程でおこる出来事の法則を述べた自然法則とする。論理法則の普遍的妥当性は、その表象の発生消滅の過程の普遍的妥当性に還元され、それは、より基礎的な学問である心理学の課題となる。

それに対し、態度決定説は、表象の発生消滅の過程でできた個々の表象や表象結合に対する主観の態度決定を本来的判断とし、論理法則を、我々の「承認」「拒否」という対立する態度決定のあり方を規制する法則であるとする。彼らにとって、論理法則の普遍的妥当性は、主観の態度決定の普遍的妥当性に還元される。そして、主観的態度決定がいかに普遍的妥当性を持ち得るのかを論ずるのが哲学の課題となるのである。

一・一・四　論理法則とはいかなるものか―「判断すること」と「判断されるもの」―

態度決定説の判断論のなした重要な区別に、判断における「判断すること」と「判断されるもの」の区別がある。

彼らは、この区別をしたのち、「判断すること」が「本来的判断」であるとする。これは、既述のごとく、否定判断にも普遍的妥当性を持つ論理法則の規制が及ぶようにするためであった。しかし、はたして、態度決定説のいうように、言表が論理的であるときに従っているとされる「論理法則」の普遍的妥当性は、態度決定の普遍的妥当性に還元されうるのだろうか。ここで、「判断すること」と「判断されるもの」という区別にそくして、論理法則とはいかなるものかについて論じてみたい。

我々の言表が、普遍的妥当性を持つ「真であるための法則」に従っている、といわれるとき、言表の中の「何が」「真であるための法則」に従っているのだろうか。例えば、私がピタゴラスの定理を言表し、それから「正しく」推論する場合、私の言表は「真であるための法則」に従っているということができる。そのとき、「真であるための法則」に規制されているのは、言表の中のどの部分であろうか。この場合、「今私が」言表するピタゴラスの定理と、「別の時に別の人が」言表するピタゴラスの定理が、「真であるための法則」に規制されるされ方は、厳密な意味で全く同じであることは明らかである。そうだとしたら、「真であるための法則」に規制されているのは、この両方の場合において「同じもの」なはずである。時間的空間的位置を持つリアルな態度決定がこの「同じもの」ではありえない。そうだとしたら、この「同じもの」は、「判断すること」のなかにあるのではなく、「判断されるもの」のなかにあることになる。

一・二　フレーゲの『思想』と『否定』

このような観点から、否定判断の解釈について抜本的な変革を行ったのがフレーゲであった。フレーゲは、『思想』において、「真理の法則」と「真とみなすこと Fürwahrhalten や考えること Denken の法則」との根本的相違を指摘し、論理学の課題は、「真とみなすことの法則を見つけることではなく、真理の法則を見つけることである」(7)とし

ている。態度決定説の論じていた「判断」（＝「判断すること」）は「真とみなすこと」であり、それを規制する法則は「真とみなすことの法則」である。「真とみなすことの法則」に規制されているのは、「態度決定」「判断作用」等のリアルな心的作用であるが、「真理の法則」に規制されているのは、「判断されているもの」である。フレーゲはこれを「思想 Gedanke」と名づける。判断作用がその都度その都度の時間的位置を持つリアルな心的作用であるのに対し、「思想」は、同じ判断がされているときに、真正な意味でイデア的に「同一の」ものである。例えば、我々が、ピタゴラスの定理を判断するとき、その時誰が判断していようが、いつ判断していようが、また、たとえ判断する主体がいなくても、ピタゴラスの定理が表現している「思想」は、同一のものである。心理主義と態度決定説はともに、「判断されるもの」を判断主観の内部のリアルな表象としたために、否定を「判断されるもの」と判断主観の関係のなかに、つまり「判断すること」の側に設定せざるを得なかった。しかし、普遍的妥当性を持つ論理法則に規制されているのは、リアルな表象や判断作用（態度決定）ではなく、イデア的な存在形態を持つ「判断されるもの」なのである。

このような図式のもとで、「否定」は、あらかじめ存在する「思想」の間の移行の関数として捉えられることになる。我々は、ある思想を表現する文に「……ない nicht」のような「否定語」を付け加えることによって、別のある文を得ることができる。そして、その文もある思想を表現している。否定とはこの二つの思想間の移行のことに他ならない。この移行を「否定すること」と名づけるなら、これは、「判断すること」とは同じものでもないし、「判断すること」の対極に位置するものでもない(8)。

かつ、「否定」によって移行する前の「思想」と移行した後の「思想」は、矛盾対当という特別な関係にある。すなわち、一方が真であればもう一方は偽であり、一方が偽であればもう一方は真である、という関係にある。したがって、否定とはある「思想」からある「思想」への矛盾対当的移行のことなのである。このような否定の解釈に

関する抜本的変革を一契機として、フレーゲによって、判断論は、命題論理学へと移行することになった。

一・三　否定判断論における二つの基本的図式の比較

心理主義、態度決定説、フレーゲの否定判断論を図式的に表現すれば次のようになる。

①心理主義は、リアルな表象結合としての「判断されるもの」を「本来的判断」とし、否定を「判断すること」の側に位置づける。（その結果、否定は判断論から除外され、論理法則の持つ客観的妥当性に直接に関与できなくなる）

②態度決定説は、「判断すること」を「本来的判断」とすることによって、否定を「判断すること」の側に位置づけたままで、否定判断を論理法則に関与できるようにした。

③フレーゲは、「判断されるもの」をイデア的存在者とすることによって、「判断されるもの」を「本来的判断」とし、同時に、「判断されるもの」の側に、否定を位置づけることを可能にした(9)。

否定判断論の分類指標の一つとして、否定判断と肯定判断の関係を並列関係 Gleichordnung とみなすか従属関係 Ungleichordnung とみなすか、という観点からの分類がある。この分類指標に従えば、心理主義は「従属」、態度決定説とフレーゲは「並列」に分類されることになる。しかし、先述のように、心理主義と態度決定説の否定判断論の違いは、否定の位置づけにおける相違ではなく、本来的判断の位置づけにおける相違である。否定判断論における本質的な違いは、むしろ、否定の所在を「判断すること」のなかに認める心理主義や態度決定説と、否定の所在を「判断されるもの」のなかに認めるフレーゲの判断論の相違にある。前者は、「否定」を先立つ判断を偽とみなす主観の態度決定のなかに位置づける（以下、このように捉えられた否定を「偽とみなす否定」あるいは「リアルな否定」とする）。そして、後者は、否定を、イデア的な「判断されるもの」の間の移行関係として捉える。（以下、

「関数としての否定」あるいは「イデア的な否定」とする）

一・三・一　「リアルな否定」の難点

双方は、それぞれの長所と短所をもっている。

まず、心理主義と態度決定説の判断論では、否定が関わる論理法則の普遍的妥当性の捉え方に問題が生じる。心理主義は、それらを思考の運動の自然法則とするに至る。また、態度決定説は、心理主義と共通の図式のもとで、いわば、リアルな「思考の運動」がいかに普遍的に妥当する法則に従うに至るかを問題とするのであるが、判断が真であったり、推論が妥当するものであったりする場合に、真理の法則や妥当性の法則が規制しているのは、その都度の時間的空間的位置を持つ判断主観のリアルな思考の運動ではなく、いつでもどこでも誰に判断される場合でも厳密に同一である「判断されるもの」なはずである。

一・三・二　「イデア的な否定」の難点

しかし、フレーゲのように、否定を「イデア的な否定」としてのみ解釈することに難点がないわけではない。ジグワルトは、否定判断が先立つ肯定判断に向かいそれについての二次的判断であることの根拠として、そうでなければ「石は歌わない。」「正義は白くない。」のような無限に多くの奇妙な真なる否定判断が有意味な判断として認められてしまう、という論拠をあげている(10)。（以下、この問題を「（真なる否定判断の）洪水問題」とする。）

否定を「判断すること」の側に位置づけ、それを先立つ肯定（あるいは定立）判断に向かう態度決定とするかぎり、上のような奇妙な否定判断の説明は可能である。それは、先立つ判断である我々の心像の生成消滅のなかで、「拒否されるべきもの」が、つまり、「石は歌う」「正義は白い」というような表象結合が、普通の状態では、発生し

ないことによって説明できる。

「イデア的な否定」のみをみとめるフレーゲのような否定解釈では、この問題は解決されない。この問題に表れている心理主義の論理学の改革における意図、つまり、我々の実感に即した判断論の作成という意図はないがしろにするべきではなく、ジグワルトの提出した「洪水問題」の解決は、判断論が、我々の実感に即したものであるか否かの一つの試金石となるべきである。この問題によって試されているのは、その判断論が、ある否定判断の発生には、それに対応する肯定判断が何らかの形で関与しているはずだ、という我々の実感を説明できるか、ということである。

二　フッサールの否定判断論―『論理学研究』の枠組みで―

『論理学研究』におけるフッサールの枠組みを使って否定判断論を再構成してみると、フッサールにおいては、先述の二つの否定の位置づけの両方を認めることができる。

二・一　「偽とみなす否定」と「幻滅化 Enttäuschung」「様相としての否定」

フッサールの判断論の基本的図式は、表意的判断を直観的判断が充実する、という図式である。『論理学研究第六研究』においてフッサールは、論理学の対象領域である客観化作用(11)の領域のなかで、「充実を志向する空虚な表意的作用（言語的表現）」と「それを充実する直観的作用」を区別をする。その後、「充実」を「質料」「性質」と並ぶ作用の契機として量的に捉え直すことにより、直観的作用による表意的作用の充実という図式は、「充実」という契機をより少なく含む作用からより豊かに含む作用へと、作用が、「充実の増強系列」をたどっていく過程として捉えなおされる(12)。そうした枠組みのもとで、否定判断論を再構成すると、否定は次のように捉えられる。

直観を伴わない言語表現のような、充実をまったく含まない空虚な表意的作用があれば、それは、直観的作用による充実を志向する。また、充実のあまり豊かでない想起のような直観的作用は、より充実の豊かな直観的作用によって充実されることを志向する。何の支障もなくその志向が満たされていく場合、作用は究極的充実を目指して、充実の増強系列をたどり、より強い充実を持つ作用との一致綜合によって次第に充実されていく。しかし、時に、志向する作用と充実する作用が一致しないで背反する場合がある。その場合、「同一である」ではなく、「異なる」「ちがう」という作用綜合が行われる。それが、すなわち、「充実化綜合」と並存する作用綜合の形態「幻滅化綜合」である。

例えば、「庭に咲いている花は赤い」という言表を（庭の見えない）部屋の中で言表する場合、「庭に咲いている花は赤い」という充実を欠いた空虚な表意的作用が遂行されている。その表意的作用は、充実を多く含んだ直観的作用による充実を志向する。また、部屋の中で「庭に咲いている花は赤い」と想起している場合や、庭の遠くから「庭に咲いている花は赤い」ことを知覚している場合も同様に、それらの想起作用や知覚作用は、より高い充実を持った作用による充実を志向する。しかし、実際に庭に出たり近くにいって花を見ることで、「庭に咲いている花は緑だ」という直観的作用が遂行された場合、先の充実を求めていた作用は充実されるのではなく、より高い充実を持った作用と背反する。そこでおこるのが、「幻滅化綜合」である。

幻滅化綜合がおこった場合、幻滅化された作用は、そのまま消えてなくなるわけではない。その作用は充実の増強系列をたどろうとしたが、途中で幻滅化をこうむった作用として残るのである。その点を考慮して、『イデーンⅠ』において、幻滅化綜合と関わる否定は、「様相としての否定」として捉え直されることになる。

『イデーンⅠ』のなかで、「否定」は、変様前の端的な確信の様相における対象定立体験である「原臆見 Urdoxa」からのノエマ的「存在性格」の変様の一つとして扱われる。原臆見として、対象は、まず、端的な確信様相におい

て定立される。それが、何らかの理由によって「可能的」「蓋然的」などさまざまな様相に様相化される。そうした様相化の中の一つとして「否定」と「肯定」がある。しかし、対象は、「可能的」「蓋然的」という様相化を受けたのちに、「可能的でない」「蓋然的でない」などとなることから、「否定」「肯定」は、それらとは次元の異なる様相化である。そこで、「否定」「肯定」は「設定立 Position」(＝原臆見から様相化を受けたものを一括して指す)を前提としてそれを「抹消する(抹消線を引く)Durchstreichung こと」と、「強調する(アンダーラインを引く)Unterstreichung こと」として規定される(13)。原臆見によって確信の様相において定立されていた対象が、幻滅化によってノエマ的性格の変様を受け、否定(「妥当しない」)という様相において定立された対象となるのである。例えば「庭に咲いている花は赤い」という事態を対象とする判断の場合、まず、予料によってであれ、あるいは、以前になされた知覚を想起することによってであれ、「庭に咲いている花は赤い」という事態が原臆見において確信の様相で定立される。そして、その後、実際に庭に行って花を知覚し、幻滅化をこうむることによってそのノエマの存在性格は否定様相へと様相化されるのである。図式的にあらわせば、〔「庭に咲いている花は赤い」＋確信様相(＝原臆見)〕→〔幻滅化〕→〔「庭に咲いている花は赤い」＋否定様相〕である。

こうしたかたちで、フッサールは、否定を「偽とみなす否定」として捉える。

二・二 「関数としての否定」と「カテゴリー形式としての否定」

それでは、フッサールは否定を「偽とみなす否定」としてのみ捉えるのかというとそうではない。フッサールにおいても、フレーゲと同様、「判断されるもの」(判断作用の対象的相関者「事態 Sachverhalt」)は、個々のリアルな判断において厳密な意味で同一のイデア的なものである。

そして、フッサールは、論理学の対象領域を言語的表現としての判断には限定しないため、対象的相関者のイデ

ア性は、いわゆる言語的判断という意味の狭義の判断作用の対象的相関者に限定されない。フッサールにおいては、一貫して、言語的判断は、直観的判断の「充実」の契機がゼロになった極限であり(14)、それは、極限として特別視されてはいるが、むしろ、客観化作用の中心は直観的作用である。

そうした枠組みのなかで、導入される概念が「カテゴリー的直観」の概念である。例えば、「ある黒い鳥が飛びたつ。」という「事態」を対象として持つ表意的作用を充実する直観的作用とはいかなるものだろうか。現実の場面において、明らかに、この判断を直観的に充実された判断として遂行する場合と、空虚な判断として遂行する場合とは異なっている。それは、例えば、私が、ある黒い鳥が飛び立つのを見ながらこの判断をしている場合と、外の見えない部屋の中で、鳥のことを思い浮かべもせずに、ただこの文を言表している場合の相違を考えれば明らかである。後者の場合その言表は直観による充実を欠いているのである。

しかし、私が、ある黒い鳥が飛び立つのを見ながらこの判断をしている場合、わたしがその時見ているものは、「この鳥は黒い。」という表意的作用を充実することもできるし、「これは鳥である。」という表意的作用を充実することもできる。すなわち、知覚されたものそのものと判断は、直接的一致の関係にはないのである。

普通の意味の感性的直観では、上の例のような「事態を対象とする表意的作用」を充実することはできない。しかし、これらの表意的作用においても、直観との一致による充実がある場合と空虚な場合とでは明らかに違いがある。そこで、事態の構成要素である（"ist, ein, nicht" などの）カテゴリー形式を含む対象を持つ直観的作用（「カテゴリー的直観」）が導入されなければならない。

ここで、否定に関していえば、充実を求める作用のなかには、「カテゴリー形式としての否定」を含む対象的相関者を持つ作用もある。そして、その作用は、「カテゴリー形式としての否定」を含む対象的相関者をもつ直観的作用によって充実されるのである。例えば、「庭に咲いている花は赤くない」という空虚な表意的作用は、庭に出て実際

に見ることによって、「庭に咲いている花は赤くない」と知覚することによって充実される。このようなかたちでフッサールは、「判断されるもの」の側における否定を「カテゴリー形式としての否定」として認める。

二・三　「偽とみなす否定」と「関数としての否定」の共存について

上述のように、フッサールの枠組みでは、「リアルな否定」と「イデア的な否定」は、それぞれ「幻滅化」（あるいは「様相としての否定」）と「カテゴリー形式としての否定」として、双方ともに認められている。しかし、フレーゲと同様に論理法則がイデア的な存在者を規制する法則であることを認めるフッサールにとってこのことは可能なのだろうか。フッサールにおいても、論理法則が、我々の態度決定を規制する「真とみなすことの法則」でなく、イデア的な存在者を規制する普遍的に妥当する「真理の法則」であることを認める限り、「リアルな否定」が論理法則に関与することは退けられなければならないのではないだろうか。そして、論理法則が普遍的妥当性を持ったイデア的存在者を規制する法則であることは、『論理学研究序説』において強調されたフッサールの出発点でもある。そうであれば、「偽とみなす」という、リアルな「判断すること」の側であらわれてくる否定は、「真理の法則」に関与することはできない。

三　発生的考察の枠組みでの否定判断論―二つの否定と論理法則の関係―

フッサールの枠組みで、このジレンマはどう解消されるのか。それについての答は、後期の『経験と判断』にみられる発生的考察の枠組みの中に求めることができる。そこでは、論理法則に従っている「事態」というカテゴリー的な対象的相関者の発生が、自我の活動の層区分のもとで分析されている。

三・一　視線の向けかえ―「カテゴリー形式としての否定」の「様相としての否定」からの発生―

それについて論ずる前に、まずここで、フッサールにおいて、二つの否定の間の関係は、どのように捉えられているのか、について規定しておかねばならない。

その関係については、『イデーンⅠ』において、ある存在様相を持つ志向的対象が、その存在様相も含めた形で新しい志向的対象となりうる、という志向的体験についての「この上なく注目すべき本質特有性」[15]として述べられている。

ある体験が幻滅化によって「否定様相において対象を定立する体験」へと様相化された場合、自我は、一方で、「否定の中に生きる」、つまり、否定を遂行することもでき、その場合、上の例でいえば、定立されている志向的対象、つまり「ノエマの核」が決定している対象性は、「庭に咲いている花は赤い」であり、ノエマ的諸性格の中の存在様相は否定である。しかし、自我は、「視線の向けかえ」によって、ノエマの全体へと、つまり、「抹消線を伴っているもの das mit Strich Versehene」へと、視線を向け、それによって「抹消線をひかれていること」も対象のなかに含めたかたちで対象を定立することができる。その場合、先の体験は、端的な確信様相を帯びた新しい原臆見として機能することになる[16]。つまり、〔ノエマの核「庭に咲いている花は赤い」＋否定様相〕は、〔ノエマの核「庭に咲いている花は赤くない」＋確信様相〕（＝新たな原臆見）となり、ノエマの核の中に「抹消線を引かれていること」までも含まれることになる。

このように、『論理学研究』において「幻滅化」と「カテゴリー形式としての否定」として捉えられた「二つの否定」は、ノエマの分析において、「様相としての否定」と「ノエマの核の中に含まれる否定」の区別として捉え直され、その「二つの否定」の間の関係は「自我」の「視線の向けかえ」によって説明される。否定の位置は、幻滅化によって生ずる「様相としての否定」から「自我の視線の向けかえ」によって「カテゴリー形式としての否定」へ

と移行するのである。

三・二　否定的事態の発生

「自我の視線の向けかえ」によって関連付けられる「様相としての否定」と「カテゴリー形式としての否定」の関係は、『経験と判断』に至って、感性的対象とカテゴリー対象の関係が、自我の能動性の程度差による意識の層区分のなかで捉えられるようになり、より詳しく規定されることになる。「二つの否定」の間の移行の役割を担う「自我の視線の向けかえ」の行われ方は、意識の高次低次の活動層によって、つまり能動性の程度差によって異なるのである。

この分析をまって、はじめて、フッサールの判断論は、「様相としての否定」と「カテゴリー形式としての否定」の関係に論理法則がどのように関与するのか、について説明することができるようになる。また、同時に、ここで、「否定」の起源についての規定もされることになる。

三・二・一　『経験と判断』における自我の活動の層区分—感性的対象とカテゴリー的対象—

発生的分析の中では、感性的、カテゴリー的という区分は、自我の遂行する作用の能動性の度合いによる、意識の高次低次の活動の区分として捉え直される。そこで意識活動の層は、大きく、①「受動的 passiv」な層と②前述定的判断の層（「受容性 Rezeptivität の層」：受容的能動性の層）と③述定的判断の層（「自発性 Spontaneität の層」：自発的能動性の層）に分けられる。「自我の視線の向けかえ」に即してこの層区分を規定すれば、

①受動的な層では、自我の能動性が関与しない綜合（＝受動的綜合）が遂行される。ここでは、自我の「視線の向けかえ」は行われない。この層を扱うのが、「連合の現象学」と言われるもので、そのなかで刺激が「類似性」

や「際立ち」をもとに「融合」していく過程が論じられる。

②前述定的判断の層（受容性の層）においてはじめて、自我の能動性が関与した綜合が表れる。しかし、そこでの能動性は「自我傾向 Ichtendenz」と呼ばれる最低限の能動性であり、自我の遂行する「視線のむけかえ」は、自我が意志をもって自発的に遂行するのではなく、刺激と受動的綜合のありかたによって必然的に決定されている。この層において同一的な具体的個物としての対象が構成される。

③述定的判断の層では、自我の「視線の向けかえ」が「自発的」に行われる。そこにおいて、はじめて、言語的表現へと直接つながることができる対象が構成される。そして、普通の意味の論理学の扱う対象はこの層で構成される対象である。

なお、ここでも、フッサールの分析の中心は、直観的作用であり、言語的表現そのものは、度外視されている。言語的表現は、あくまで、述定的判断の層の自我活動で構成されたカテゴリー的対象の与えられ方の一つである。

三・二・二　否定の起源―前述定的層における幻滅化―

自我の視線のむけかえの「自発性」のない②受容性の層において、否定はその起源を持っている。受容的層においては、自我の活動は、①の受動的層において受動的に構成された刺激の総合に促されて「傾向」として進む。そこでは、自我は自発的な意志を持たない。ただ、この層おいても、対象の構成のなかで、予料が働いている。

例えば、前面が見えている「赤く丸い球」をみているとき、自我は、裏面も「赤く丸い」という予料をもっている。自我は、自発的に何かを産出しようという意志を持つことなしに、これまでみえていなかった側面に対する期待志向（＝予料）を生み出し、それを充実しようとする。そして、その過程自体が一つの具体的対象を構成するのである。そこで起こる自我の「視線の向けかえ」は、「同じ対象を常にあらたなあらわれ方のもとに捉えようとする

傾向」であり、そうして展開される「傾向の充足過程」のなかで、「否定」は生まれる。裏面の「赤く丸い」という予料を充足していくなかで、「緑で窪んだ」という印象があらわれ、先の予料は「幻滅化」をこうむる。それによって「赤く丸い」という予料のなかで定立されていた対象的相関者は様相化されて「否定」「そうでない」という様相を帯びて定立されることになる。

受容的層においては、ここまで、である。また、具体的な対象の構成のなかであらわれる予料のなかには、「否定」的な対象的相関者が現れることはない。したがって、この層においては、「否定」は、「様相としての否定」でしかない。そして、これが、高次の層における否定の起源である。「否定は、本質的に意識の変様 Modifikation であり」、「否定にとって本質的なのは、既に構成された意味 Sinn の上に新しい意味が排除 Verdrängung をともなって一つになる、という被覆［Überlägerung・覆い被さること］である。」(17)

否定を先立つ判断を前提としてそれを偽とみなすことと規定した心理主義や態度決定説の判断論は、この層における自我の活動を中心に扱ったということもできるだろう。

三・二・三　述定的層における「カテゴリー形式としての否定」の発生

述定的層において、はじめて、「言語的表現」と直接に関係する（「所与性様式」の変様によって言語的表現となることのできる）カテゴリー的対象、「普遍者」や「（カテゴリー形式を持った）事態」が産出される。この層でおこる、「カテゴリー形式としての否定」を含んだ「事態」の発生、つまり、「否定的事態」の発生はいかにして起こるのかについて次にみてみる。

述定的層における自我の活動の最大の特徴は、この層において、自我の能動性は「自発的」に「認識への意志 Wille zur Erkenntnis」(18)をもって対象の構成に関与し、そこでは、自我の「視線のむけかえ」が自発的におこなわれてお

り、自我は「認識財産として知識を確定しよう」という目論見で活動を行う、ということである。

我々は、経験によって得たものを、他人に伝達したり、後の自分のために定着保存しておいたりして、「認識財産」として確定しようとする。確定への意志、認識財産としての定着への意志、とは、換言すれば、言語的表現に直接変様することができる対象の構成への意志と考えることができる。幻滅化によって「否定様相」において事態を定立することになった体験は、原臆見ではなく、すでに様相化された体験であるため、そのままでは、幻滅化の経験自体を反映させて言語的表現に直接変様することができない。「様相としての否定」は様相のままでは、認識財産として定着させることはできない。

例えば、「事態：庭に咲いている花は赤い〔予料〕」が「事態：庭に咲いている花は緑だ〔知覚〕」によって幻滅化される場合を考えてみると、そこでおこっているのは、同じものについての背反する作用の両立によって一旦分裂した自我の統一が、背反する作用のどちらかが、いわば、抗争に打ち勝つことによって統一を取り戻す、という過程である。「事態：庭に咲いている花は赤い〔予料〕」と「事態：庭に咲いている花は緑だ〔知覚〕」の二つを対象とする作用が抗争して、より充実の豊かな後者が前者を打ち負かす。そして、打ち負かされた前者は、自我の統一的な流れから追い出されるが、そのまま消えてなくなるわけではない。それは、「事態：庭に咲いている花は赤い〔否定様相〕」という幻滅化をこうむった体験として残る。

我々は、この体験を認識財産として定着させようという意志をもつ。しかし、抗争に負けた方の作用は、幻滅化され否定様相において対象をたてている状態では自我の統一のなかに参画して認識財産として機能することはできない。「庭に咲いている花は赤い」を「妥当しない」ものとして定立している体験は、そのままでは、他人や未来の自分が使用できるような知識として機能することはできない。

「幻滅化の経験」自体を認識財産として定着するには、否定様相において対象を定立している体験を、視線の向け

かえによって、「カテゴリー形式としての否定」を内に含んだ対象を定立する原臆見へと移行させなければならない。

つまり、未来にわたっての認識財産として統一的自我の一部に参画するためには、その体験は、「視線の向けかえ」によって、新しい原臆見として、「事態：庭に咲いている花は赤くない〔確信様相〕」へと移行されなければならない。そうしてはじめて、新たな対象的相関者（事態：「庭に咲いている花は赤くない」）を持った新たな原臆見とその変様系列ができ、その変様系列の一つの典型として言語的表現「庭に咲いている花は赤くない」が生まれるのである。

三・三　ジレンマの解決

以上の考察から、フッサールの枠組みで再構成された否定判断論が、論理法則のイデア性と「偽とみなす否定」の両立をいかに果たしているかを見て取ることができる。論理法則とは、述定的層において産出されるカテゴリー的対象を規制する規則であって、自我が「認識への意志」をもって自発的に活動するこの層では、「様相としての否定」は「カテゴリー形式としての否定」へと移行されるよう常に方向づけられている。また、特に、それが言語的表現にもたらされる場合には、上でみたように「様相としての否定」はそのままでは言語的表現へと移行することはできないのであるから、「様相としての否定」が「カテゴリー形式としての否定」へと移行させられることは必ず前提とされている。

論理法則は、こうして産出された「カテゴリー形式としての否定」をうちに含んだ「事態」を規制するものであり、そこには「偽とみなす否定」は関与してこない。否定の起源である「偽とみなす否定」の振る舞い、例えば、それが、「カテゴリー形式としての否定」へと移行する過程の分析など、は、志向性の本質構造を探求する現象学の対象領域であり、それは直接的に論理法則についての分析ではない。それは、むしろ論理法則を基づける、より根

源的な考察なのである。

三・四　洪水問題の解決

また、「偽とみなす否定」を否定の発生の起源とすることによって、フッサールは、否定判断の発生において、それに先立つ肯定判断がいかに関与しているかについて説明することができ、ジグワルトの提出した「洪水問題」も解決しているといえる。最後にこの点について述べておきたい。ジグワルトのいうような奇妙に思える無限の真なる否定判断は、自我の活動によって起源から構成されたものではない否定判断であり、その否定判断の発生の歴史のなかに、自我の経験のなかで実際に遂行された予料としての肯定判断が関与していないのである。付言すれば、実際には、ほとんどの判断は自我の経験から根源的に構成されるわけではなく、我々は、既に言語的表現などのかたちで沈殿した空虚な判断に出会うことのほうが多いので、その場合には次のような言い換えが必要である。すなわち、このような否定判断とは、真であるかを確かめるために発生の起源にさかのぼろうとする際に、予料のなかで自然に発生してくる肯定判断の関与の歴史を再びたどることができないような判断なのである。そして、このような事情が、我々が普通感じる、こうした否定判断の「奇妙さ」をなしているのである。

四　まとめ

以上から、フッサールの枠組みによって再構成された否定判断論が、心理主義の当初の意図であった我々の実感にそくした判断論の実現、と論理法則のイデア性の両立をいかに果たしているかが明らかになった。

しかし、本論文においては、その道具立てについて、まだ論じ残した部分が多く残されている。そのなかの一つは、「視線の向けかえ」についての問題である。本論文では、この概念を、フッサールの体系のなかの一つの重要な鍵概

念として取り出すことのみで終わったが、この概念は、いわば、「リアルな否定」から「イデア的な否定」を生み出すものであり、今後、より詳細に中心的に論じられるべきである。そして、それは、フッサール自身が論理学についての考察から、中後期に至って、自我、あるいは現象学的方法論についての考察へと中心を移行させていった一つの理由でもある。

このように論じ残した課題はあるものの、本論文の考察によって、フッサールの論理学についての考察がいかなる図式で何を意図していたのか、については照明があてられたと考える。論理法則と関係する「判断されるもの」の側の「イデア的な否定」は、フッサールにおいては、即座に「関数としての否定」としては規定されない。「関数としての否定」という「判断されるもの」の側の性質は、また、そのように捉えられた否定が関係している矛盾律、排中律などの論理法則の本質は、経験の中の「幻滅化」と、幻滅化によって生じる「様相としての否定」という起源にまでさかのぼっての考察によって、解明されなければならないのである。

（了）

注

（1） Sigwart, C., *Logik Bd. 1 (5.aufl.)*, (1924) J. C. B. Mohr, Tübingen., S. 28.

（2） 「燃えている」という心像というと奇妙に聞こえるかもしれないが、ジグワルトにおいては、表象とは語が直接指示するものであり、このような「述語」のあらわす心像は、言語習得の過程で得られるものとしている。(Sigwart,C., *Logik Bd. 1*, S. 104.)

（3） Ibid., S. 103.

（4） Ibid., S. 105.

（5） Windelband, W., *Beiträge zur Lehre vom negativen Urteil*, (1921) J. C. B. Mohr, Tubingen. [『否定判断論』岩波書店 1928], S. 170.

（6） Windelband, W., *Präludien Bd. 1*, (1924) J. C. B. Mohr, Tubingen., S. 25.

（7） Frege, G., "Der Gedanke (Logische Untersuchungen: Erster Teil)", *Kleine Schriften*, (1990) Georg Olms, Hildesheim. [『フ

レーゲ哲学論集』岩波書店1988], S. 59.

(8) Frege, G., "Die Verneinung (Logische Untersuchungen: Zweiter Teil)", *Kleine Schriften*, S. 152.

(9) 実際の術語使用に即せば、事情はもう少し複雑であるが、ここでは、「本来的判断」という言葉を、「言表のうちの論理法則の規制が及んでいる部分」という意味で統一して使い図式化した。

(10) Sigwart, C., *Logik Bd. 1*, S. 156.

(11) 客観化作用とは、『論理学研究第五研究』で導入される一群の作用の領域のことである。それは、事態を対象とする判断と名辞的対象を対象とする表象、及びその二つの作用と同じ対象を持つ非措定的作用の総称であり、他の願望、疑問等の非客観化作用を基づける作用である。作用の分析によって論理学を考察するフッサールにおいては、この客観化作用が論理学の問題とする作用である。

(12) Husserl, E., *Logische Untersuchungen Bd. 2 Teil 2*,Max Niemeyer, Tübingen (1968) [『論理学研究4』みすず書房 1976] (以下、LU2-2等とする)、§16-§24.

(13) Husserl, E., *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie : Erstes Buch*, Hua. 3 (1976) [『イデーンI—I』『イデーンI—II』みすず書房 第一巻、一九七四 第二巻、一九八四] (以下、Ideenとする)., S. 218.

(14) LU2-2, §23. Ideen, S. 210, 211.

(15) Ideen, S. 217.

(16) Ibid., S. 219.

(17) Husserl, E., *Erfahrung und Urteil*, Felix Meiner, Hamburg (1985) [『経験と判断』河出書房新社 1975], S. 97.

(18) Ibid., S. 232.